

.....

・『PHN（思想・人間・自然）』 第25号

（2015年3月） 〔Web版〕

・〔【新原稿による復元版】、2023年2月〕

・【旧原稿による復元版は省略】

.....

・石原純新短歌鑑賞

——『新短歌』の時代から——

.....

和田耕作

.....

【解題】

- ・『PHN（思想・人間・自然）』第25号（2015年3月）の「石原純新短歌鑑賞」の復元版を2023年2月に「新原稿」により作成した。
- ・以下の石原純の新短歌などは、『石原純全歌集』（和田耕作編、2005、ナテック刊）より引用した。

.....

- ・ 実証論 (昭和 12 年)

照るための 陽ではない、
夜を つくるための 昼なのである。
〈二つの手〉の存在を実証せよ。

.....

- ・ この作品については、石原純による「自歌自釈」がある。
「自分の二つの手は互ひに反対の側にありながら、それらはい
つも争ふことなく協力する。それは同一の自分に属するから
である。それと同じやうに同一の社会や同一の国家に属する
か人々は、たとへ互ひに反対の立場に立たうとも恰も 〈二つ
の手〉のやうに互ひに協力すべきであり、またその協力が実
証されなくてはならないのである。」〔『石原純全歌集』、p175〕

- ・このような解釈に読者が、たどり着くのは至難の業であろう。
だが、例えば三浦梅園の「会易」論を あてはめてみると、
石原純の自釈は、よく理解できる。「昼と夜」「男と女」などは、
「会易」の一例である。「男と女」の協力なくして、人間社会
は成立しない。

.....

- ・ 戦争心理 (昭和 13 年)

粥のやうな軟らかさ、なめし皮のやうな硬さ。
さて 現代の世界は、そして人間は、
とにかく自分を 主義でいろ別けする。

.....

- ・「主義でいろ別けする」との状況は、現代でもあてはまる。
今日でも、「人間」たちには「進歩」がないような「分断」と
いうものが蔓延しているありさまである。

.....

- ・ 果てしなく世界は乱れる (昭和 14 年)

人間は ふしぎにも愚かな生き物である。

知らぬ間に 魔法の色硝子を もたされて、

お互ひを透き見しながら 争ひあつてゐる。

.....

- ・ 前作品を受けて、「人間は ふしぎにも愚かな生き物である。」と
言われると納得である。石原純の作品は、これまで評価されずにき
たが、今日、再評価の時を迎えていると言えるであろう。

.....

- ・ 運 命 (昭和 14 年)

開かれた窓より、

閉ざされた窓の かなたにこそ

この世の神秘はある と云ふ。

かくて人間は 人間を欺いてゐる。

.....

・「人間は 人間を欺いてゐる。」との言葉も、実に今日的である。

現代の犯罪の本質は、まさに人間が「人間を欺いてゐる。」結果のほかならない。

.....

・ 雲 (昭和 15 年)

雲の瞑想は 神秘である。

神々のけだかい 毛ごろものやうな

雲のすがたよ。

雲は 時刻 (とき) を知らない。

ふと生まれて、やがて消え失せ、

でも、常に悠々と 心伸びやかである。

.....

- ・「雲」の一篇には、「詩人・石原純」のすがたがある。石原純は、新短歌において、なによりも「詩的精神」を探究しつつ、表現したのであった。
- ・山村暮鳥の詩「雲」は、あまりにも有名である。石原純の念頭には、暮鳥の詩のイメージがあったのかもしれない。
- ・また、「雲」は、いつの時代にも詩的表現の頂上にあった。
- ・夏目漱石の最期の漢詩でも、「雲」〔「白雲」〕は、その詩の核心であった。

.....

眼耳双忘身亦失 〔眼耳 双つながら忘れて 身も亦た失い〕

空中独唱白雲吟 〔空中に独り唱う 白雲の吟〕

(吉川幸次郎著『漱石詩注』、岩波文庫より)

- ・「野の詩人・堀井梁歩」を、追悼した江渡狄嶺の漢詩の一部もここに挙げておこう。

.....

醇質似対名月 〔醇質は名月に対するに似て〕

詩心似見白雲 〔詩心は白雲を見るに似る〕

(江渡狄嶺著『地涌のすがた』、青年書房刊より)

.....

- ・〔『PHN (思想・人間・自然)』第25号、2015年3月〕
- ・〔2023年2月25日、新原稿により復元版を作成、PHNの会〕
- ・〔新原稿：2023年2月21日、和田耕作 (C)、無断転載厳禁〕

.....